



未来をひらき、
世界を結ぶ

特別インタビュー

勝俣宣夫 会長
社団法人 日本貿易会

インタビュアー：徐迪旻（本誌編集主幹）



グローバル化が急速に進展する中で、地球規模でネットワークを構築し事業を展開している商社に国内外からの期待がいつそう高まっている。その商社・貿易関連団体の意見をとりまとめ政府および関係機関に積極的に提言しているのが日本貿易会だ。

会長・勝俣宣夫氏は名門商社・丸紅をV字回復させた、中興の祖。2008年からは日本貿易会でも会長として辣腕を振るい、日本経済の活性化と世界経済の健全な発展に寄与すべく、「新・貿易立国」の実現のために積極的に活動を展開している。

今回は勝俣宣夫会長に日中関係の発展に向けた提言、そして上海万博への期待をお話しいただいた。

本日はお忙しい中お時間を割いていただきまことにありがとうございます。

日中の貿易関係が拡大し密接に連携している今、会長からのお話をお伺いできることを楽しみにしておりました。本日念願が叶い嬉しく思っております。

そうですね、日本との貿易においては、2007年、2008年では中国が最大の貿易相手ですよ。

はい。中国から見ても、日本への貿易はもっとも大切だと考えられます。

「貿易は単純な商売ではなく、志をもって行うもの」と先日中国大使館の方もおっしゃっていました。それではまず最初に、日本貿易会の役割をお聞かせください。

日本貿易会は、戦後間もない1947年に貿易の促進を目的とした経済団体として設立され、1986年には、商社・貿易団体を正会員とする業界団体へ改組し今に至っております。

その間、わが国の貿易および貿易業界の健全な発展を図り、日本経済の繁栄、国際経済社会の発展に寄与すべく幅広い活動を行ってきました。とりわけ、貿易・投資にかかわる諸問題について、政府や関係機関に積極的に提言、要望を行い、その解決によって貿易をさらに促進していくことが日本貿易会の重要な役割と考えています。

なるほど、では日中のあるべき貿易関係について会長はどのようにお考えでしょうか。

一方的に日本側の利害だけでは進めてはいけないということです。「負けて覚える相撲かな」という言葉がありますが、勝つてばかりいても学習効果はないのです。1980年代の前半は中国で事業投資を行いました。結果的にはたくさんの方々が失敗をした時代がありました。その経験を生かして、ウイン・ウインの関係で事業や貿易をして、お互い繁栄するような流れで交流してきていると思います。

日本と中国は、お互いに大切なビジネスパートナーであり、現在は二国間だけでなく、グローバルな視野に立ち、より広い領域において相互の信頼・協力関係を築くべきであると考えています。

そうですね。おっしゃるとおりだと思います。



す。私もまったく同感です。

来年7000万人を目標とした上海万博が開幕します。万博を通じて、さらに日中貿易を拡大しようという意味もあるのですが、これまでの中国に関する主な取り組みについてお聞かせください。

日中国交正常化に先立つ1971年に、日中貿易や中国経済の研究および関係者との懇親を旨に当会内に中国委員会を発足させました。この結果、翌1972年には「日中国交正常化と経済関係の樹立に関する要望」を日本政府に提出したのです。

さらに、日中間の友好親善と貿易の健全な発展を目的として、1975年に当時日本貿易会会長だった水上達三氏を団長に総勢18名の日本貿易会友好訪中代表団を派遣しました。以後も1985年の第4次訪中団まで派遣を続けて日中貿易の促進に努めました。

また、2001年12月、中国のWTO加盟に際しては、当会に特別研究会を設置し、「中国ビジネスと商社」というテーマで1年にわたって研究、討議を続け、2003年に、その成果を「中国ビジネスと商社 ― 巨大市場へのあくなき挑戦 ―」という一冊の本にまとめ発刊しました。

このように、大きな節目において、前向きな取り組みをおこなってきました。

5〜6年前、中国に行ったとき、いわゆる走出去政策が行われており、中国製品の海外進出が始まっておりました。当時、中



国はまだ世界各地にビジネスパートナーを作れておらず、「日本商社の国際的ネットワークを活かして、中国メーカーのプラントを売ろう」ということになりました。これから飛躍、発展しようとする中国で、商社の利点を活かして成功させた事業の一例です。また、アジアの国で発電所設備の大きな入札があり、中国と日本が協力し、双方の得意分野で、お互いに品質が良く競争力のあるものを出して売り込むことになりました。当時、日本商社と中国の走出去政策が意外とうまくマッチングして、双方のウイン・ウインで大きな成功を収めたのです。こういう経験から、我々は、これからも中国の関係業者、企業と手をつなぎ、アジアの経済を進展させていくことに役立つことができると思います。

なるほど、素晴らしいことだと思います。

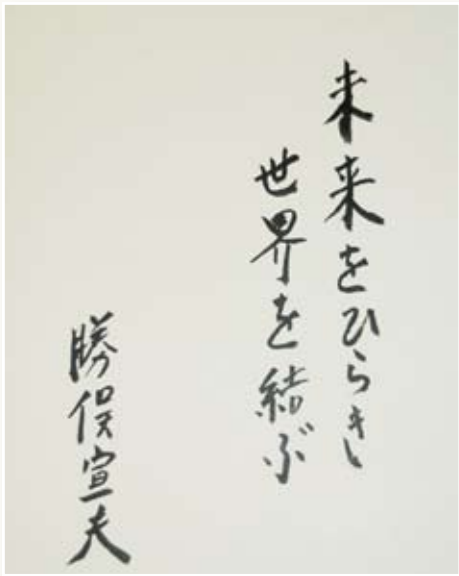
2010年の上海万博はエコ、環境を重視した万博でもあります。商社の担う役割は多岐にわたると思うのですが、都市化や経済発展に伴う重要な課題となってくる環境問題における商社の役割をお教えてください。

商社は早くから環境問題に取り組み、再生可能エネルギーの開発、植林、リサイクル、省エネシステムの導入等をおこなってきました。また、昨今は国内のみならず海外での事業展開や投融資においても、これら環境関連技術を積極的に取り入れた取り組みをおこなっています。

環境問題における商社の役割は、その幅広い事業領域を活かし、グローバルな視野に立って、社会資本の充実や健全な経済成長の基盤整備に寄与していくことにある



特別インタビュー
勝俣宣夫 会長
 社団法人 日本貿易会



日本貿易会キャッチフレーズ



と思っております。
 では、これからの商社の進むべき方向性についてお聞かせください。

かつて「商社斜陽論」が取り沙汰され、単純な輸出入取引においては、商社の機能が発揮できなくなり、商社の存在そのものが問われた時代がありました。そこで商社は、新しいビジネスモデルを開拓しようと、海外・国内において積極的な事業投資を行い、川上から川下までのサプライチェーンにおいて、高機能、高付加価値化を進めてきました。さらに、先ほどの環境問題でも触れたように、商社は社会的課題の解決と事業性を両立させるべく努力と工夫を続けてきたのです。

今後は、世界のいたるところで育っていくであろう新しい産業、新しい市場において、より複雑化する社会的課題の解決と事業性の両立を実現していく上で、商社は常にその最前線に立ち、その幅広い事業領域と着実に蓄積された機能を最大限に生かしていくべきであると考えます。

最後に、勝俣会長は『未来をひらき、世界を結ぶ』をキャッチフレーズに掲げていますが、その意図はどのようなものなのでしょうか。

先ほど申し上げたことから、世界がみんなまで協力しながら発展し、自由貿易を推進していく努力しなければならぬのです。商社としても、そうした未来に向けて、世界のあちこちを結び付けながら少しでも

も世の中のお役に立てればとの願いがあります。

今回の万博のテーマはベターシティ・ベターライフです。
 都市を良くして人も良くなる。今回の万博は人を中心にして、より良い万博を開催しようという理念ですが、会長から上海万博に対するコメントをお聞かせください。

1970年に大阪万博がありました。非常に良かったのは若い人が万博を見ることで最先端の技術を見て、未来に夢を持ってくれたことだと思っております。上海万博は、さらに大きな夢を抱いて自国のため、世界のために頑張り、若い人たちがみんなが参加し、次の世代、未来につなげていくという良い機会だと思っております。

上海万博の成功が中国のみならず、アジアのさらなる発展につながることを期待するとともに、上海万博のテーマである「Better City, Better Life」の実現に向けて世界が集う場であって欲しいと願っております。日本貿易会としても、微力ですが上海万博を応援したいと思っておりますし、その成功を心より願っております。

ありがとうございます。これからの日中、アジア全体がより良い関係を維持し、発展していくことに私も少しでもお役に立ちたいと改めて思いました。本日はお忙しいところ、貴重なお話を伺いでき、とても勉強になりました。ありがとうございました。